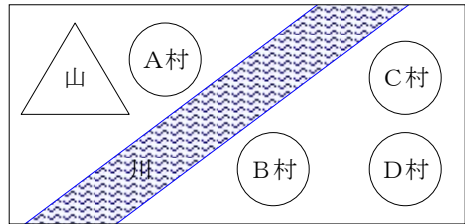


[A] 小国の分立と統合ーテキスト P4 対応(テキスト P4 の下部も参照)ー

弥生時代に水稻耕作の技術が広がり、余った食料を蓄積することが可能になったことで、貧富の差が生まれて身分階級が発生した。そして、地域ごとに集落(ムラ)が形成されると、治水・灌漑などの共同作業を指導し、集落(ムラ)を統率する首長が現れるようになった。まあ、簡単に言えば集落(ムラ)をまとめるリーダーが登場したわけだ。

でも、右図のようにA村・B村・C村・D村といった各集落の立地条件は異なる。山ではイノシシやシカを狩ったり、ドングリ・木の実などを採集できるし、川では魚を捕ったり、稲作に必要な用水も確保できるよね。

ということは立地的な有利な場所の順は、山と川に近い「A村」、川に近い「B村」・「C村」、川から離れている「D村」ということになる。



じゃあ、「D村」はA村・B村・C村を滅ぼして奪っちまえばいい。こうして、灌漑用水の確保や余剰生産物の収奪などをめぐって争い(戦争)が始まり、強力な集落であった「D村」は、周辺の集落の「A村・B村・C村」を滅ぼして、「集落(ムラ)」から「小国(クニ)」へと発展していったんだ。

そして、紀元前1世紀頃には、倭人(当時の日本人のこと)は100余りの小国が分立している状態になっていて(当時の日本は「倭」と呼ばれ、7世紀末以降から「日本」が国号となる)、その小国の王が朝鮮半島の楽浪郡という行政区に定期的に使者を派遣して朝貢していたんだ。

でも、ここで疑問が2つ生じる。1つ目は「なぜ倭の小国の王たちは朝鮮半島に定期的に遣使していたのか」、2つ目は「なぜ倭が100余国に分かれていて朝鮮半島に遣使していたことがわかっているのか」だけど、それを理解するためには当時の中国について説明しておかなければならない。

＜紀元前の中国＞

紀元前221年に中国全土を統一して、史上初めての皇帝となったのが漫画「キングダム」に出てくる「秦」の始皇帝。そして、その「秦」が滅亡した後、「項羽と劉邦(司馬遼太郎の歴史小説・横山光輝の漫画)」でも有名な劉邦が項羽を破って中国を統一する(初代皇帝の劉邦が建国した「漢」は、紀元202年～紀元後8年までの「前漢」と紀元後25年～220年までの「後漢」に分けられる)。

この「漢(前漢)」は第7代皇帝の武帝の時代に最盛期を迎え、紀元前108年には朝鮮半島にあった衛氏朝鮮を滅ぼして朝鮮半島も支配下に置くことになった。そして、その支配のために楽浪郡(現在の北朝鮮の首都平壤付近にあたる)・臨屯郡・真番郡・玄菟郡という4郡の行政区(植民地という説もある)を設置したんだ。

つまり、楽浪郡は「漢」が朝鮮半島を支配するために置いた役所であったわけだ。だから、倭が楽浪郡に定期的に使者を派遣すれば、中国や朝鮮半島の先進的な文物を手に入れることができる(特に農具や武器として加工する鉄資源が目的であったと考えられる)。そして、1世紀に班固が編纂した漢の歴史書『漢書」地理志に以下の一文が記されていたことから上記の内容がわかるんだ。

A 紀元前1世紀前後の倭『漢書』地理志 by 班固

夫れ楽浪海中に倭人有り。分れて百余国を為す。歳時を以て来り献見すと云ふ。

(楽浪郡(紀元前108年、漢の武帝が朝鮮北部の衛氏朝鮮を滅ぼして設置した植民地4郡の一つで、現在の平壤付近にあたり、313年に高句麗によって滅ぼされた)の海の向こうには、倭人(日本人)が住んでいて、百余の小国に分かれている。そして彼らは楽浪郡に、定期的に貢物を持って朝貢して来るという。)

『漢書』地理志に記されてあった倭に関する記述は、「楽浪郡の向こうには倭人(日本人)が住んでいて、100 ぐらいの小国に分かれていて、定期的に貢物を持って挨拶に来るんだよね。」という一文だけなんだけど、ちょっと“定期的”に来ている理由について考えてみよう。

定期的に来るということは、何かしら欲しいものがあり、倭(日本)にはないものを求めて楽浪郡にやって来ているはずだね。その欲しいものの一番は、農具や武器に加工するための“鉄資源”なんだ。当時の倭(日本)国内には鉄を加工する技術はあったんだけど、鉄資源そのものは採掘できなかった(現在のところ、日本で発見されている製鉄遺構は6世紀のものが最古のものであるため、砂鉄や鉄鉱石から鉄をつくる製鉄技術が日本で確立されるのは6世紀以降と考えられている)。

そのため、中国から鉄を譲ってもらうため、中国の支配下にある朝鮮半島の楽浪郡に定期的に使者を派遣していたと考えられるわけだ。ただし、求めていたのが鉄資源だけとは限らないので、教科書には「中国や朝鮮半島の先進的な技術を入手するため」と書かれているわけだ。

さて、ここまでは紀元前1世紀の話で、紀元後1~2世紀になると倭国内では小国同士の戦いによって潰したり潰されたりという関係が進んでいく。これを教科書っぽく言うと、小国の王による地域の統合が進展していったけど、この戦いに生き残っていった「A国」・「B国」・「C国」があったとしよう。その場合「A国」は、「B国」・「C国」の2つから挟み撃ちに合うことを警戒しなければならない。そこで、「A国」は

A国「おうおう、B国・C国よ。うちに攻撃でも仕掛けるのはやめときな。とんでもねえことになっからな？」

B国「なんだなんだ？それは盛大なフリか、このやろう？」

C国「せやせや。ドタマかち割って、耳の穴から手突っ込んで、奥歯ガタガタ言わしたるか？」

A国「へへ、実はよ。ちとら、ちょいと前に使いを派遣して中国様に挨拶してきたんよ。そしたら、中国様からこの地域の支配権を正式に認めてもらってなあ。」

B国「な、なにい！？」

C国「何やと！？…せ、せ、せやかて、それがどない意味があんねん！？」

A国「ふふふ、わからないのか？俺の地域の支配は中国様のお墨付きなんだよ。もし、うちに攻め込んできたら、中国様がお怒りになって援軍とか送ってきちゃうかもしんねえってことだ！(さすがに援軍は送ってくれねえだろうけど…)」

B・C国「く…、くそう！！！」

…まあ、こんな感じだと思う(笑)。なので、紀元後1~2世紀になると、「中国皇帝の権威を利用して、倭国内での立場を高めるため」、楽浪郡ではなく当時の中国「後漢」の都である洛陽にまで使者を派遣しているんだ。

なお、これまでの中国の王朝は「漢」だったけど、紀元後8年に外戚の王莽に帝位を奪われて「新」を建国されてしまった。しかし、その「新」も紀元後23年に滅ぼされ、劉秀が紀元後25年に「漢」を再興して光武帝として皇帝に即位した(そのため、紀元前202年~紀元後8年までの漢を「前漢」と呼び、光武帝が中興した漢を「後漢(紀元後25年~220年)」と呼ぶ)。その後漢の歴史書が5世紀に范曄が編纂した『後漢書』で、その中の東夷伝という章に倭に関する記述が記されていたんだ。

その中で最初のものが、57年(史料文中では建武中元二年)に倭の奴国という国の王が大夫という役職の者を中国に派遣して、後漢の都である洛陽にまで赴いたそう。そうしたら、後漢を建国した光武帝もわざわざ遠くからやって来て嬉しかったんだろうね、「おう、遠くから挨拶に来るとは偉いな。プレゼントやるわ。」と印綬(印章とそれを身につける組み紐のこと)をあげたそう。

でも、ここに出てきた奴国という国はどこにあるのかわからん。そんな中、江戸時代の1784年に甚兵衛という筑前国(現在の福岡県)で暮らしていた農民が、「さ〜て、今日も農作業がんばっぺよ！」って働いていたら、「ガチコーン！」って変な音がして、次ページのようなものが出てきた。

甚兵衛「お役人さん～～！！何か志賀島で仕事してったら、こんなキンピカなものが出てきたんだけど…。」

お役人「お、お、お前！！こ、こ、こりゃあ金印でねえか！しかも、これは印面(裏側)を見てみい。これは何て読むのかな…、正確にはわかんねえけど「**漢委奴国王**」って読むこともできるな。もしかして、あの『後漢書』東夷伝に記載されている奴国のもらった印綬のことかもしれねえぞ！」

この「**漢委奴国王**」というのは、「漢」の下に位置する「**委**(本来は「倭」だが、人偏を省略したと考えられる)」の中の「**奴**」という国の「**国王**」と意味になる(異説の読み方もある)。だから、入試問題で「**漢委奴国王**」と記述する時には、「**倭**」ではなく「**委**」になるので特に気をつけてほしい。

そして、この金印が**福岡県の志賀島**という本土と陸続きになっている島から発見されたことから、奴国は福岡県**博多**地方に存在した国であると考えられる。さらに、近くにある**福岡県の須玖・岡本遺跡**から発見された**壺棺墓**が奴国の王墓だと推定されているんだ(授業解説[弥生時代]でも出てきたのでリンクさせておいてほしい)。

なお、時々「福岡県志賀島から発見されたのは金印だけじゃなくて、与田ちゃんですよ！」って乃木オタの主張もあるけど、色気もあるとよとか、写真集が20万部突破したとか(2020年4月現在)、飼っているヤギの名前がごんぞうだとか、乃木オタではない僕にはよくわからないのでそこはスルーしておこうと思う。



〔出土した金印〕



〔金印の印面(裏側)〕

さて、奴国の王が後漢に使いを派遣したのが57年だったけど、そこからちょうど50年後の**107年**(史料文中では**安帝の永初元年**)にも、**帥升(師升)**とする説もある)という九州に存在したと考えられる倭国の王が、**160人の生口(奴隷)**の(こと)を後漢の皇帝**安帝**に献上してきたそう。まあ、何をプレゼントしたら喜ばれるかわかからないから、奴隷なら使用があるだろうと思ったんじゃないかな。ただし、「生口とは何のことをさすか？」という記述問題が出題された時には、奴隷の「隷」をしっかりと書けるようにね。

このように、57年の奴国王も107年の帥升(師升)もわざわざ後漢の都である洛陽にまで使者を派遣したということは、それだけ倭国内での争いが激化していったため、中国皇帝の権威を利用して、自分の立場を強化しようとしたわけだ。そして、後漢の桓帝・靈帝が治めていた**2世紀後半**(史料文中では**桓靈の間**)になると、倭国内は大乱となって收拾がつかなくなってしまうそう。

㊦ 1～2世紀の倭『後漢書』東夷伝 by 范曄

建武中元二年、倭の**奴国**、貢を奉じて朝貢す。使人自ら**大夫**と称す。倭国の極南界なり。**光武**、賜ふに**印綬**を以てす。

安帝の永初元年、倭の国王**帥升(師升)**等、**生口百六十人**を献じ、請見を願ふ。

桓靈の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐して歴年主なし。

(**建武中元2年(57年)**、倭の**奴国**が、貢物を持って都にまで朝貢してきた。その使いは自分のことを**大夫**(中国王朝の官名)という身分だと称した。奴国は倭の最南端にある。**光武帝**はこの奴国王に**印綬**(組み紐のついた印。江戸時代に「**漢委奴国王**」の金印が**福岡県志賀島**で出土したため同一のものと考えられる)を授けた。

安帝の永初元年(**107年**)には、倭の国王**帥升(師升)**が**160人の生口(奴隷)**の(こと)を献上し、**安帝**にお目にかかりたいと願い出た。

桓帝と靈帝の時代(2世紀後半)、倭の国内が乱れ、内乱が続き、互いに戦って長い間統一されなかった。)

[B] 邪馬台国—テキスト P4 対応(テキスト P4 の下部も参照)—

2 世紀後半の倭国は内乱状態が続いて、四六時中戦いが起きていた。授業解説[弥生時代]でも説明した、防衛的な機能をもつ環濠集落や高地性集落もこの頃に多く造られていることがわかっているの
で、よっぽど戦が絶えなかったんだらうね。

そんな中、争いを続けていた小国の首長(リーダー)たちもさすがに疲れてきたのだろう。皆で集まってこんな会話をしたとかしないとか。

A王「なあ、もう戦やめへんか…、ワイ疲れたわ。」

B王「確かなな、ちょっと俺も休みたいわ。」

C王「だったらさ、僕らみんなで集まって連合するっちゃうのはどうだい？」

D王「それいいですね。じゃあ、小生^{しょうせい}らが連合すれば、他の大国にも勝てるかもしれません。」

A王「せやな！じゃあ、ワイが連合のリーダーやたるわ！」

B王「はあ！？お前がリーダーなんかになったら、皆まとまるわけねえだろ！」

A王「何やと！？」

C王「じゃあ、ここは間をとって僕が…」

D王「いやいや、小生^{しょうせい}が…」

と男だらけでは全然話がまとまらないでいたら、そこに謎の女が出てきた。

謎女「だったら、あたしに任せてみない？」

A王「誰や、お前は！？」

謎女「わたしね、特殊な力を持っているの。」

A王「なんだと！？どんな力だ！？」

謎女「神のおつげを聞くことができるのよ。」

A王「な、な、なにに！？なら、やってみろや！」

謎女「アーレンソーメンヒヤソーメン。

ポコペンポコペン、誰がつついたポコペンポコペン。

タッカラプト、ポツポルンガ、プピリット、パロ！」

※2 行目(ドラゴンボールのピッコロ大魔王の呪文)

※3 行目(ドラゴンボールのポルンガを呼び出す呪文)

B王「…お、お、おい！空が暗くなったぞ！」

C王「こ、こいつは本物だ…。」

D王「お、お名前は何と申されるのですか！？」

謎女「あたし？卑弥呼^{ひみこ}よ。」

こうして、鬼道^{きどう}と呼ばれる現代でいう神のおつげを聞くシャーマニズム^{シャーマニズム}の能力をもった、邪馬台国^{やまたいこく}の女王であった卑弥呼^{ひみこ}が、30 カ国余りの小国をまとめるリーダーとなったんだ(誤解されがちだが、邪馬台国は 30 カ国まとまった集合体をいうのではなく、30 カ国余りが連合した中で最も力をもった盟主国の立場にあったのが邪馬台国である)。こうして、小国の首長たちが共同で卑弥呼を女王に立てたことで、倭国内での争いは収束したそうだ。なお、この邪馬台国について記している史料が有名な『魏志』倭人伝^{わいにでん}なんだけど、ここでまた中国の歴史について少し説明しておかなければならない。

—<三国時代の中国>—

これまでの中国は「後漢^{こうかん}(25 年～220 年)」が統治していたが、末期になると政治が乱れて、184 年に起きた紅巾^{こうきん}の乱以降は衰退していくことになる。なお、いずれ登場する地名として、その後漢末に朝鮮半島の楽浪郡^{らくろうぐん}を支配していた公孫孫氏が、楽浪郡の南半分を割いて設置したのが帯方郡^{たいほうぐん}という行政区で、所在地は現在のソウル^{ソウル}に比定されている(つまり、楽浪郡^{らくろうぐん}は現在の平壤^{ピョンヤン}付近・帯方郡^{たいほうぐん}は現在のソウル^{ソウル}付近と、それぞれ北朝鮮・韓国^{韓国}の首都にあたるのでまとめて覚えた方がよいだろう)。

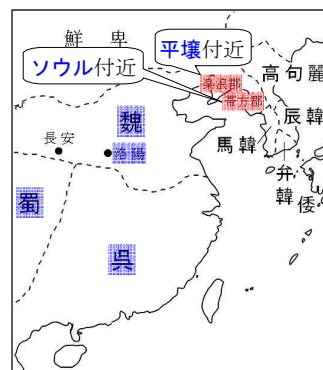


その後漢が220年に滅亡すると、この紅巾の乱の平定に功を挙げた人物たちによってそれぞれ国が建国される。それが曹操・曹丕父子が建国した「魏(220~265)」・劉備が建国した「蜀(221~263)」・孫堅・孫権父子が建国した「呉(222~280)」による有名な三国時代だ。そして、この三国時代を扱った歴史書が3世紀に陳寿が編纂した『三国志』なんだ(小説・漫画・ゲームの「三国志」の方が有名になっちゃった感はないけど)。

なお、その三国時代の過程は、まず263年に「蜀」が「魏」によって滅ぼされるんだけど、既にその「魏」内部では重臣が権力を掌握しているという内紛が起きていた。結局、265年にクーデターによって「魏」は滅亡して、司馬炎という人物が初代皇帝となった「晋(西晋)265~316)」が建国されるんだ(正確には「晋」は洛陽を都とした「西晋(265~316)」と、建康(現在の南京)に遷都した「東晋(317~420)」に分けられる)。そして、280年には「晋(西晋)」が「呉」を滅ぼして三国時代を統一することになり、この「晋」時代の内容は7世紀に房玄齡らによって編纂された『晋書』という歴史書に記されている。

上記の内容は、これから邪馬台国について詳しく説明していくための前提。そして、220年に後漢が滅亡した後の三国時代の「魏」・「呉」・「蜀」の中で最も強大だったのが、邪馬台国の卑弥呼が遣使した「魏」なんだけど、後漢と同じように洛陽を都としていたことも要因かもしれないね(中国における都は「前漢」の頃は長安だったが、「後漢」・三国時代の「魏」・「晋」の都はすべて洛陽なので、このページで出てくる中国の都を答える際は洛陽と解答しておけば○になる)。

そして、その邪馬台国に関する内容が、「魏」に関する『魏志』倭人伝に記されていたんだけど、ここまで出典として登場した『漢書』地理志・『後漢書』東夷伝・『魏志』倭人伝における『○○』について気になっている者も多いと思うが、これはそれぞれちゃんと意味を持っているんだ。



[3世紀の東アジア]

例えば、紀元202年~紀元後8年までの「漢(前漢)」の歴史書は、そのまま『漢書』という。そして、その『漢書』では政治・外交・社会・地理などのいくつかの項目に分かれていて、その中の地理に関する項目を地理志というので、一般的に『漢書』地理志と呼ばれるわけだ。

同じように、紀元後25年~220年までの「漢(後漢)」の歴史書は、そのまま『後漢書』といい、その中の東に住んでいる蛮夷(野蛮な民族という意味)に関する項目が東夷伝というので、一般的に『後漢書』東夷伝と呼ぶ。

さらに、220年~280年までの魏・呉・蜀の三国時代に関する歴史書は、『魏書』・『呉書』・『蜀書』に分かれていて、その3つをまとめて『三国志』という。その中の一書である魏に関する『魏書』東夷伝倭人条を略して『魏志』倭人伝と呼ぶ。

ゆえに、入試問題において出題される時に気をつけてほしいことがある。史料問題などが出題されて「この史料の出典は何か？」と問われたら、『漢書』地理志・『後漢書』東夷伝・『魏志』倭人伝とそのまま答えてくれればいんだけど、「この書物の名称は何か？」と問われたら、『漢書』・『後漢書』と書物の名称である『○○』までしか書いてはならない。

そして、一番気をつけておきたいのが、邪馬台国に関する『魏志』倭人伝で、『魏志』倭人伝はあくまでも『三国志』の一書『魏書』東夷伝倭人条の略称にすぎない。ゆえに、「この書物の名称は何か？」と問われたら、『魏志』ではなく『三国志』と答えなければいけないんだ。

＜史料の出典・書物の名称に対する解答の仕方＞

- ①「史料の出典を答えよ」→『漢書』地理志・『後漢書』東夷伝・『魏志』倭人伝など
- ②「書物の名称を答えよ」→『漢書』・『後漢書』・『三国志』など

さて、3世紀に陳寿が編纂した『魏志』倭人伝(正式名称は『三国志』魏書東夷伝倭人条)に、30カ国余りの小国連合の中心である邪馬台国が記されていたわけだけど、有名なように邪馬台国の所在地は未だ確定しておらず、九州説と近畿説の2つが存在する。じゃあ、なぜその2つの説が存在しているのか？そして、一体どちらの方が有力な説なのか？

正直、あまり興味ない人も多いだろうけど、ちゃんと勉強してみると意外に面白いので、興味があったら以下の内容を読んでみてほしい(難関私大・国公立受験者は読んでおいてほしいかな)。

＜邪馬台国論争①＞

実は、『魏志』倭人伝には邪馬台国への行き方が記されている。現在のソウル付近にあたる帯方郡がスタート地点で、ここから南に下って朝鮮南部の「狗奴韓国」を通して、「対馬国」→「一支国」→「末盧国」→「伊都国」→「奴国」→「不弥国」→「投馬国」と進んでいくと、最終的に「邪馬台国」に着くそう。そして、この途中で通るたくさんの国々は「投馬国」と「邪馬台国」を除き、現在のどこら辺かほぼ判明していて、現在の地名とその根拠となる遺跡を挙げると以下ようになる。

- 「対馬国」(対馬→長崎県対馬市)
- 「一支国」(老岐→長崎県老岐市) ※原の辻遺跡(長崎県老岐市の大塚遺集落)
- 「末盧国」(佐賀県唐津市付近?) ※宇木汲田遺跡(佐賀県唐津市の甕棺墓から朝鮮半島系の銅鏡などが出土)
- 「伊都国」(福岡県前原市付近?) ※平原遺跡(福岡県糸島市の方形周溝墓から銅鏡などが出土→伊都国の王墓とされる)
- 「奴国」(福岡県福岡市付近?) ※須玖岡本遺跡(福岡県春日市の甕棺墓から銅鏡などが出土→奴国の王墓とされる)
- 「不弥国」(福岡県宇美町付近? or 福岡県飯塚市付近?)

途中の国名だとか根拠となる遺跡なんて全く出題されないの
で放っておいていいんだけど、最後の「投馬国」と「邪馬台国」
がどこにあるのかわかっていないんだ。ただ、『魏志』倭人伝に
はこれらの国々に行くための方角と距離が記されている。

「おいおい、だったらそれで計算すればいいじゃん。」と思う
でしょ？ところが、この方角と距離をもとに計算してみると、九
州を通り過ぎて太平洋にまで出てしまうんだ。つまり、史料文中
に記されている「南に進む」とかの「方位」、「七千里(里は距離
の単位)進む」とかの「距離」のどちらかが間違っているのでは
ないか、ということになる。また、後述するが邪馬台国の南には



〔邪馬台国論争〕

「狗奴国」というライバル国がいたという記述もあるので、それも考慮しなければいけなくなる。

そこから、佐賀県吉野ヶ里遺跡を有力な論拠とした九州説と、奈良県纏向遺跡を有力な論拠とした近畿説の2つが浮上する。前者の九州説は『魏志』倭人伝の記述は、方位は正しいが距離の計算を誤ってしまったのではないかとするもの。そうすると九州北部に邪馬台国があり、ライバル国の狗奴国は南九州にあったと考えることができる。その論拠が佐賀県吉野ヶ里遺跡になるんだけど、その九州説の場合には、邪馬台国は九州北部だけを支配している小さめの連合政権の盟主国ということになるわけだ。

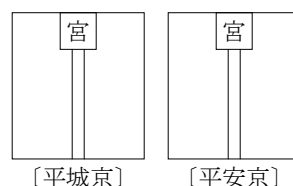
一方で、後者の近畿説は『魏志』倭人伝の記述は、方位の考え方が誤っていて距離の計算は正しいとするもの。誤ってしまったのではないかとするもの。距離を正しいと考えると、近畿地方に相当するし、奈良県纏向遺跡の中には古墳時代前期の中でも最大規模の箸墓古墳という卑弥呼の墓ではないかと考えられている古墳もあるからね。ただ、邪馬台国は福岡県前原市付近にあったとされる伊都国も支配下に置いていたのは確定しているの、そうすると近畿説の場合は、九州北部～近畿地方にまで及ぶ広域の連合政権の盟主国であったということになる。なお、この近畿説をとるとライバル国の狗奴国は関東地方と考えることができるんだけど、「狗奴国って“南”にあったんだろ？」という疑問に対しては次の＜邪馬台国②＞で説明していこう。

正直なところ、邪馬台国論争については研究者に「さっさと結論出してくれよ」って気持ちなんだけど、現在のところは近畿説の方が有力になってきている。その理由が現在発掘調査が進められている奈良県の纏向遺跡^{マキムカウ}なんだけど、近畿説の「方位」に関する疑問が解決していないので、そこを解説していこう。

＜邪馬台国論争②＞

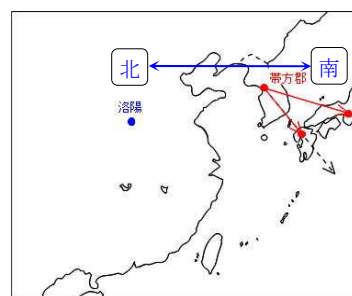
邪馬台国近畿説では「距離」は正しく「方位」が誤っていると述べたけど、正確に言うと「方位」の捉え方が間違っている。「???」といった感じだろうけど、現在の方位磁石による東西南北という意味合いで考えてはいけない、ということ。

例えば、右の図は平城京・平安京の構図なんだけど、天皇の御所がある宮(大内裏)は北に位置しているよね。これは中国の思想に影響を受けているんだけど、中国では天の中心である北極星^{ほっきょくせい}を不動の存在として中心に見たてて、天子(皇帝・天皇など)は北に背を向けて南を向き、民衆は北を向いて天子と向き合う天子南面・臣下北面という思想があり、中国の長安城なども「宮(皇居)」は北側に位置している。



まあ、簡単に言えば、中国では天の中心である北極星が位置する「北」こそが、皇帝が居るべき場所なわけだ。では、これを魏の都であり皇帝のいる洛陽を「北」と考えてみよう。

この「方位」の考えからに基づいて、南に正しい距離で進んでいけば、近畿地方へと向かってくことになる。これが近畿説における「方位」の捉え方なんだけど、ではその場合の「南」に位置するライバル国である狗奴国はどこにあたるのか。それは、もちろん関東地方が「南」に位置するすることになるので、九州北部～近畿地方にまで及ぶ広域の連合政権の中心国である邪馬台国と、関東地方を中心にした連合政権の中心国である狗奴国が対立していたという構図が出来上がる。そして、これを前提にして考えていくと、＜邪馬台国論争③＞で説明するヤマト政権や古墳の出現との関連性も見えてくるんだ。



〔邪馬台国論争近畿説〕

ここまでは邪馬台国の九州説と近畿説の2つが成り立つ理由を説明してきた。では、邪馬台国のその後はどうなったのだろう？これは残念ながらわかっていない。なぜなら、中国の歴史書である『三国志』・『晋書』に邪馬台国のことが出てくるんだけど、これは3世紀の倭(日本)の様子。しかし、4世紀になると中国の歴史書に倭(日本)のことは記されておらず、5世紀の『宋書』倭国伝によりやく倭(日本)の記事が出てくるんだけど、それまでの約150年間は中国の歴史書に倭(日本)に関する記述が書かれていないんだ。そして、その5世紀にはヤマト政権(大和政権)という豪族による連合政権が既に出来上がっていて、邪馬台国の存在がどうなってしまったかについては記されていない。

つまり、史料によって研究していく文献学はここまでが限界なんだ。でも、遺跡・遺構などを研究していく考古学の分野から考えていくと、邪馬台国論争は近畿説が有力なのではないかと思うんだ(あくまでも僕個人の見解であり、他にもいろいろな説があるので興味があれば研究してみてください)。

＜邪馬台国論争③＞

3世紀に邪馬台国の女王であった卑弥呼は死後に大きな墓に埋葬されたんだけど、その卑弥呼の墓ではないかと考えられているのが、古墳時代前期(3世紀後半～4世紀)の中で最大規模の前方後円墳である奈良県箸墓古墳だ。箸墓古墳を卑弥呼の墓だと断定することはできないけど、『古事記』・『日本書紀』によれば箸墓古墳に埋葬されている人物は、皇族で巫女的な能力を持っていた女性の「倭迹迹日百襲姫命^{やまとひもひめのみこと}」という人なので卑弥呼の人物像とも重なるよね。つまり、卑弥呼の墓ではないかと考えられる箸墓古墳の造営こそが古墳時代の始まりと考えることができるわけだ。

続いて、4世紀になると畿内・瀬戸内地方を中心に前方後円墳が造営されていくんだけど、この頃には畿内・瀬戸内地方の豪族を中心とした連合政権であるヤマト(大和)政権(王権)が成立していたと考えられる(昔はヤマト(大和)朝廷などという言い方があったが、この時代は朝廷のような仕組みは整っておらず、大和地方を中心として「**大王家**(のちの天皇家)」という最大の勢力を中心に連合した大和豪族連合政権と呼ぶようなものに過ぎなかった)。

でも、豪族の連合政権にすぎないわけだから、裏切り者も出るかもしれない。そこで、その連合政権の結びつきを強化するために、前方後円墳という変わった形をした同じ古墳を造らせていったわけだ。まあ、各地に前方後円墳という同じ形をしたお墓があるということは、それらを造った豪族たちが何かしら連絡を取り合って結束・連合していたはずだからね。ゆえに、古墳前期(3世紀後半～4世紀)に畿内・瀬戸内地方を中心に前方後円墳が登場することから、大和地方を中心とした豪族の連合政権であるヤマト政権が成立していたと考えられるわけだ。

そして、鉄資源の確保を目的に畿内・瀬戸内の豪族が連合して(その目的は[授業解説(古墳時代)]で説明するが)、のちに九州北部の豪族たちも勢力下に組み込んでいったと考えられている。これは、古墳の大きさが畿内>瀬戸内>九州の順になっているんだけど、ヤマト政権における豪族の序列を表していると推察されているからなんだ。ゆえに、序列の低い九州の豪族は不満も溜まりやすいので、九州の**伊都国**に**一大率**という監視役を設置したり、6世紀には**筑紫国**造であった**磐井**という九州の大豪族が反乱を起こしたりしたのかもしれないね(もちろんいずれ解説する)。

4世紀に畿内・瀬戸内を中心に前方後円墳が登場したと述べたけど、一方で関東地方では前方後方墳というまた別の形の古墳が築造されていた。これは上記の内容と同じで、関東には前方後方墳という共通の古墳を造る、別の豪族による連合政権があったと考えられる。



しかし、5世紀になると関東の前方後方墳はなくなっていき、形態も前方後円墳に変わっていくんだ。これは、関東にあった豪族の連合政権が、畿内・瀬戸内を中心としたヤマト(大和)政権に駆逐されていき、その結果前方後円墳が造られるようになったと考えられるよね。

ここでこう推察することができる。4世紀に関東にあった豪族の連合政権って、あの狗奴国だったのではないかと。〈邪馬台国論争②〉で邪馬台国畿内説をとった場合、ライバル国であった狗奴国は関東地方にあたると述べたはずだ。そうすると、3世紀にあった邪馬台国も「ヤマタイ国」→「ヤマト国」→「ヤマト政権(王権)」というように響きが変わっていったと考えることができる。ゆえに、邪馬台国畿内説をとった場合には、その邪馬台国がのちのヤマト政権につながっていったと考えることができるわけだ。

〈邪馬台国近畿説のまとめ〉

3世紀	邪馬台国(九州北部～畿内の30カ国小国連合の盟主国) ↓ ※卑弥呼の死後に前方後円墳を築造?	←→ 狗奴国(関東の豪族連合) ↓
4世紀	大和政権(大王家中心の九州北部～畿内の豪族連合政権) ↓ ※前方後円墳を築造(畿内・瀬戸内中心)	←→ 関東地方の豪族連合政権 ↓ ※前方後方墳を築造
5世紀	大和政権(大王家中心の九州北部～関東の豪族連合政権) ※前方後円墳を築造(全国的に築造)	→ 駆逐? → ※前方後円墳を築造

かなり長い学説を紹介したけど、入試で必要な知識は以下の内容で十分だ。佐賀県**吉野ヶ里遺跡**を論拠とした邪馬台国九州説の場合には、九州北部を中心とした小城の政治連合があったということになり、奈良県**纏向遺跡**を論拠とした邪馬台国近畿説の場合には、近畿～九州北部に及ぶ広域の政治連合が成立していたことになり、のちのヤマト(大和)政権につながることになる、ということだ。

さて、その邪馬台国の仕組みについては正誤問題などでも問われてくるので、『魏志』倭人伝に記されている内容を踏まえながら押さえていこう。

まず、邪馬台国の女王が**卑弥呼**で、**鬼道**と呼ばれる**シャーマニズム**(神や霊のおつげを聞くことができる能力)で民衆を支配していた。そして、巫女さんの的な立場にもあたるので(?)、ババアのくせに夫は持たず、弟が政治を助けていたそう。また、卑弥呼の住んでいる宮殿に良からぬ奴が近づかないように、**楼観(望楼)**という物見やぐらや城柵も設けられていたんだってさ。

一方、地方には連合政権の中で裏切り者などが出ないように、**一大率**という諸国を檢察する役人を九州北部の**伊都国**に設置していて、まわりの国々はビビっていたんだとさ。上述したように九州は、邪馬台国連合の中でも序列が低く、地理的に遠いし独立心が強かったことが背景じゃないかな。

なお、テキストに書かれているけど、その伊都国が存在していたのが福岡県前原市付近という知識は絶対に出題されないのだから覚えていい。「出たらどうするんすか?」というなら、逆立ちして鼻からスパゲッティ食べてやるよ。この福岡県前原市付近という一行がないとバランスが美しくなくなっちゃうのよね。ほら、テキストの構成を見てみるとわかるけど、政治(3行)・地方(2行)・社会(3行)・習俗(2行)になっているでしょ?これが、地方だけ1行になってしまうと見栄えが悪くなってしまうから、「とりあえず2行にしたいから、福岡県前原市付近でも入れておっか」ってノリで付け足しただけだしね(笑)。

さて、社会・風俗を見ていくと、弥生時代に身分階級(貧富の差)が発生したように、邪馬台国でも支配する側の**大人**と支配される側の**下戸**の身分制度が存在していて、その差はかなり激しい。身分の低い下戸が身分の高い大人に道端で会ったら、「どうぞどうぞ!」って草むらに入って、蹲ったり跪いたりして物事を述べなければいけなかった。さらに、統治を行うために必要なことでもあるけど、**租税制度や刑罰制度もあって**、生活するための**市場もあって**、**大倭**という役人が盗みだとか転売ヤーなどが現れないように市場を監視していたんだってさ(物々交換の時代なので、転売ヤーはいない)。

そして、最後は時々テレビやアニメなどで見たことがあるかもしれないけど、右図のような男性が着る坊主の袈裟みたいな服装を**袈裟衣**といって、女性が頭からすっぽり着るワンピースみたいな服装を**貫頭衣**という。最後に、**男性は大人も子供も顔や体に入れ墨をしていたんだ**けど、生徒から以前「何で男だけが入れ墨をしていたんですか?」と質問されたことがある。正直「(知らねえよ…)」と答えたかったが、わからなかったので6時間ほどかけて入れ墨(タトゥー)の歴史などについて調べてみた。魔除けの効果があるだとかいろいろ考察してみたけど男性だけだしな〜、と悩んで悩んで悩んだ挙句答えが出ました。…ファッションです。アフリカの部族がしていたりするものと同じですね。…ふう、つまらない話ようやく終了(笑)。



〔袈裟衣(左)・貫頭衣(右)〕

ようやく重要な話に入っていこう。既に述べたけど、卑弥呼の治める邪馬台国には、卑弥呼という男(ギャグみたいな名前だな)が治める**狗奴国**というライバル国がいた。その狗奴国を倒すため、卑弥呼は中国から援軍でも送ってもらおうとでも考えたのだろう。

そして、**239年**(史料文中では景初二年だが**景初三年**の誤り)に、自称**大夫**(中国の官職名)という役職であると名乗る**難升米**を魏に派遣したんだ。…まあ、とは言っても正確には中国の支配下に置かれている朝鮮半島の**帯方郡**(現在の**ソウル**付近)に向かわせて、「すんませ〜ん。卑弥呼の使者なんですけど、貢物も持ってきましたので中国皇帝にお会いさせてもらえませんかね〜?」って感じにすぎないんだけどね。

＜中国への遣使の覚え方＞

「こんないーオンナにサンキュー」

→ こんな(57年)＝奴国王の遣使

いーオンナ(1-7)＝帥升の遣使

にサンキュー(239)＝卑弥呼の遣使

そうしたら、許可が下りたので魏の都である洛陽に送って中国への遣使の覚え方>弋皇帝明帝に挨拶できたんだけど、そうしたら魏の皇帝も遠くの倭から来てくれたことで嬉しかったのかもね。

「アイヤ〜、遠いところからよく来たアルね！じゃあ、倭の女王である卑弥呼に称号あげるアルよ！我々の魏と親しい倭の王ってことで親魏倭王なんてどうアル！？それから、他にもプレゼントとして銅鏡でもあげるアルね！でも、卑弥呼ってババアだったアルよね？鏡で自分の顔を見たら、老け顔に怒って割っちゃうかもしれないから銅鏡 100 枚あげるアルよ！それから、プラスのプレゼントとして金印紫綬(金印とそれを身につけるための組み紐)もあげるアル。」

ここで、よく受験生が間違えるのが 57 年の奴国の王が賜った金印紫綬に記されていたと考えられる「漢委奴国王」と、239 年の卑弥呼が賜った称号の「親魏倭王」だけど、前者の漢字は「委」、後者は「倭」であること。奴国王の時の中国は「漢」で、その下の「倭(委)」の中にある「奴国王」に対してで、卑弥呼の時の中国は「魏・呉・蜀」の三国時代の「魏」と「親」しい「倭王」になるわけだから、さすがに語句を間違えるのは論外かな。ただ、卑弥呼が賜った金印紫綬(金印とそれを身につけるための組み紐)も、漢委奴国王が賜ったものと同じタイプのものであると思われるが、卑弥呼が賜った「親魏倭王」の称号が入った金印は未だに発見されていない(もし発見されたら邪馬台国論争は決着がつくだろう)。

― 奴国王(57)と卑弥呼(239)の遣使の違い ―

奴国王の遣使(57) … 漢の光武帝から金印紫綬を賜る → のち「漢委奴国王」の金印発見
卑弥呼の遣使(239) … 魏の明帝から金印紫綬(発見されていない)と「親魏倭王」の称号を賜る

でも、魏の皇帝から銅鏡 100 枚を賜ったのだから、それは日本に持ち帰っているはずだね。その中で、日本国内で三角縁神獣鏡と呼ばれる鏡が多く発見されているんだ。これは右図①のように表面図から見てもよくわかんないんだけど、右図②のように断面図で見ると「三角形の縁」をしていて、表面に「神獣が描かれている鏡」なので、その構造を知っていれば答えやすいと思う。



〔三角縁神獣鏡〕

(左図①＝表面図)・(右図②＝断面図)

なお、100 枚ピッタリ見つかった遺跡はないんだけど、古墳時代前期の前方後円墳である奈良県黒塚古墳からは 33 面の三角縁神獣鏡が出土していて、京都府椿井大塚山古墳からも 32 面の三角縁神獣鏡が出土している。なので、卑弥呼が賜った銅鏡 100 枚は三角縁神獣鏡なのではないかと推定する説もあるんだ。

さて、そんな卑弥呼ちゃんだったんだけど、ライバル国の倭奴国との抗争中の 248 年に亡くなってしまったそう。死因は戦死なのか病死なのか老衰なのか不明だけど、人々はその偉大なる女王である卑弥呼のために、奴隷とかも一緒に 100 人殉死させて大規模なお墓を造ってあげたそう。

その卑弥呼のために造られたのが古墳なんだけど、「古墳って卑弥呼の古墳なんじゃね？」と言われているのが奈良県の纏向遺跡内にある箸墓古墳だ(「箸」の漢字は竹冠の下にある「者」の間に「丿」が付いているので要注意！)。

箸

この箸墓古墳には埋葬されている人物があつた「倭迹迹日百襲姫命」なんだ。…って誰やねん。うん、この人は『古事記』・『日本書紀』に書かれてあるんだけど、皇族で巫女的な能力を持っていた人だそう。なので、卑弥呼の能力に似ていることから、「倭迹迹日百襲姫命」は卑弥呼のことじゃないかと考えられていて、箸墓古墳は卑弥呼の墓ではないかと考えられているわけだ。

その卑弥呼が死んだ後には、男の王がついたんだけど、人々は従わずに 1000 人程が亡くなる惨事となってしまった。そこで、卑弥呼の姪にあたる宗女(一族の女のことを指す)の香与(台与とも)という 13 歳の女子を王女に立てたら、みんな「ロリコン最高!!!」って感じで国が収まったそう。

㊦ 邪馬台国『魏志』倭人伝(『三国志』魏書東夷伝倭人条)by 陳寿

倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す。旧百余国。漢の時朝見する者あり。今、^③使役通ずる所三十国。郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓国を歴て、乍は南し乍は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里。……南、邪馬台国に至る。

…国々に市あり。有無を交易し、大倭をして之を監せしむ。女王国より以北には特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。諸国之を畏憚す。常に伊都国に治す。……尊卑各々差序あり、相臣服するに足る。租賦を収むに邸閭あり。下戸、大人と道路に相逢えば、逡巡して草に入り、辞を伝へ事を説くには、或は蹲り或は跪き、両手は地に抱り、之が恭敬を為す。

其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑はす。年已に長大なるも、夫婿無し。男弟有り、佐けて国を治む。

景初二年(※景初三年の誤り)六月、倭の女王、大夫難升米等を遣し郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。…その年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く「……今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を仮し、装封して帯方の太守に付し仮授せしむ。…」

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、国中服せず。更々相誅殺し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女壹与の年十三なるを立てて王と為す。国中遂に定まる。

(倭人(日本人)は帯方郡の東南の海の向こうに住んでいて、山に囲まれている島に国や村をつくっている。もともと百余国に分かれ、漢の時代には朝貢するものもあった。現在魏に使者を遣わしてくるものは30国である。郡(帯方郡)から日本に行くには、朝鮮半島の海岸沿いを航海し、韓国を経て、あるいは南の方へ、あるいは東の方へいって、狗邪韓国につくまで七千里ほどある。…その後、さらに進んでいくと最終的に邪馬台国に着く。

国々には市場があり、物々交換が行われ、大倭という役人がそれを監視している。卑弥呼のいる女王国より北には、一大率という役人を置いて諸国を檢察している。諸国はそれをおそれている。伊都国に常に置かれている。……身分に上下の差別があり、お互いにふさわしい態度をとる。租税を納める大きな邸宅がある。下戸(身分の低い者)が大人(身分の高い者)に道であった時は、おそろおそろ草むらに入ってしまう。何か申し上げる時は、うずくまったり、ひざまずいたりしながら、両手を地につけ相手を敬う。

其の国(邪馬台国)は、もと男の王が70,80年支配していたが、国内が乱れて何年間も互いに攻め争うようになった。そこで共同で一人の女子を王に立てた。その名を卑弥呼といい、女王は鬼道(呪術)を得意とし、人民を支配した。年をとっても結婚せず、弟が政治を補佐している。

景初3年(239年)、倭の女王(卑弥呼)は大臣の難升米らを郡(帯方郡)に遣わして、魏の天子(明帝)に朝献できるように願い出た。(その後、帯方郡の長官である劉夏が都の洛陽まで送らせた)。

その年(239年)の12月、明帝は詔書を下して倭の女王(卑弥呼)に報じていうに「…今あなたを親魏倭王とし、金印紫綬をさづけ、封をして帯方郡の長官にことづける」

卑弥呼が死んだ時、大きな墓をつくった。その直径は150メートル余りで、女王に殉死した奴婢が100人余りであった。その後、男の王が立ったが、人々は心服しなかった。おたがいに殺し合い、千人ほどが死んだ。そこで、卑弥呼の宗女(一族の女)、壹与が13歳で王となると、国中が安定した。)

さて、壹与ちゃんが邪馬台国の女王についた後、中国ではクーデターにより「魏」が滅ぼされ、265年に「晋(西晋)」が建国された。そこで、翌年の266年に壹与ちゃんが晋(西晋)の都である洛陽に遣使しているんだけど、このことは『魏志』倭人伝ではなく、晋の歴史書である『晋書』に記されているんだ(少し細かな話になってしまうけどね)。

ただし、ここまでは倭(日本)の状況が中国の歴史書に記されていたため問題ないけど、その後の中国では「晋」が「呉」を滅ぼして三国時代を統一したものの、北方民族に侵攻されて316年に滅亡してしまう。まあ、のちに今までの都の洛陽から建康(現在の南京)に遷都した「東晋(317~420)」が再興されるんだけど、この辺の中国の時代を「五胡十六国時代(304~439)」という。

まあ、つまりは統一王朝の存在しない戦乱の時代となってしまう、日本なんかのことを歴史書に記している余裕なんて無くなってしまったんだろうね。そのため、倭(日本)に関する記述は『晋書』に記されて以降、約 150 年間中国の史書に倭(日本)に関する記述は記されていないんだ(そのため、この時期にあたる古墳時代前期は謎に満ち溢れた時代となる)。

なお、その後は 420 年に中国南部に建国された南朝の宋を中心とした勢力と、439 年に建国された北朝の北魏による「南北朝時代(439～589)」に突入していくんだけど、これは[授業解説(古墳時代)]でまた触れていこう。

さてさて、上記の内容はこれ以降の朝鮮半島における説明のための前フリ。4 世紀以降の中国は「五胡十六国時代(304～439)」・「南北朝時代(439～589)」といったように戦乱状態となり、統一王朝は存在しなくなったわけだ。…ということは、前漢・後漢を含む「漢」の時代に持っていた朝鮮半島に対する中国の支配力・影響力は弱体化することになるよね(以下はテキストの地図を参照してほしい)。

そのため、既に朝鮮半島の北部に成立していた「高句麗」という国にとっては、朝鮮半島から中国の勢力を追い出すチャンスだ。そして、騎馬民族でこの当時は朝鮮半島最強であった高句麗は楽浪郡を 313 年に滅ぼして、朝鮮半島から中国の政治勢力を駆逐することに成功するんだ(同じく帯方郡も 313 年に高句麗によって滅ぼされている)。ほら、楽浪郡とか帯方郡は中国の「漢」が朝鮮半島を支配するために設置した行政区だったでしょ？それが滅ぼされたことによって、中国は朝鮮半島に対する影響力を失うわけだ。ただ、さすがに中国の北朝・南朝どちらも敵にまわすと厄介なことになるので、のちに高句麗は北朝の北魏に朝貢するようになる(これは古墳時代において必須の知識になるので押さえておいてほしい)。

そして、これが朝鮮半島南部にも影響を与える。3 世紀までの朝鮮半島南部は馬韓(朝鮮半島西南部)・辰韓(朝鮮半島東南部)・弁韓(朝鮮半島南部)という三韓と呼ばれる 3 つの種族・地名から成り立っていた。つまり、これらは 3 世紀までの朝鮮半島の地域の名称と考えるとわかりやすいね。でも、今は楽浪郡・帯方郡が滅ぼされて中国の影響力は及ばなくなった。

そして、馬韓には 55 国の小国があったんだけど、これを 4 世紀前半に統一したのが「百濟」という国だったんだ。ただ、北に位置して北朝に朝貢している高句麗を警戒していたので、それに対抗するため百濟は南朝の宋に朝貢し、さらに倭(日本)とも友好関係を結んでおくため 369 年に七支刀という刀を倭にプレゼントしてくるんだけど、これらの詳細は[授業解説(古墳時代)]で解説していこう。

また同じように辰韓にも 12 国の小国があったんだけど、これを 4 世紀前半に統一したのが「新羅」という国だったんだけど、最初の頃は弱小国で高句麗の服属下に置かれていたそう(いずれ 6 世紀になると強大な国になっていく)。

一方、朝鮮半島南部の弁韓に関しては 4 世紀以後も 12 の小国が連合した状態で、百濟や新羅のような統一国家は誕生せず、伽耶(加羅)諸国と呼ばれていた(日本側の『日本書紀』では任那と呼ばれた)。そして、朝鮮半島南部で採れる鉄資源を確保するため倭(日本)は伽耶(加羅)諸国と密接な関係を持っていたんだ。

＜三韓の覚え方＞

「くだらんバカは知らんし勘弁」
→ くだら(百濟)んバカ(馬韓)は
知らん(新羅)し(辰韓)
勘(伽耶・加羅)弁(弁韓)

＜三韓と朝鮮南部三国の違い＞

馬韓(3 世紀までの朝鮮半島西南部の地域の名称)→4 世紀前半に百濟(統一国家)が統一
辰韓(3 世紀までの朝鮮半島東南部の地域の名称)→4 世紀前半に新羅(統一国家)が統一
弁韓(3 世紀までの朝鮮半島南部の地域の名称)→4 世紀以降は伽耶(加羅)と呼ばれる小国の連合

まとめると、4 世紀前半に馬韓を統一した百濟と、辰韓を統一した新羅といった統一国家が誕生したけど、弁韓は伽耶(加羅)諸国と呼ばれて小国の連合に過ぎなかったということなんだけど、上記のようにまとめるとわかりやすいかな。